

愛知県内のインクルーシブ公園における空間要素と構成に関する研究

1 研究の背景

近年、日本の公園整備は量的拡充から質的向上へと重点が移行している。高齢化の進行や多様な障害・特性を持つ子どもや大人の増加により、誰もが安心して利用できる公園の必要性が高まっている。しかし、従来の公園は健常児中心の遊具構成や、利用者の多様性に十分対応できていない現状がある。そのなかで、海外を中心に広がってきた「インクルーシブ公園」は、障害の有無や年齢に関わらず利用できる考え方をもとに発展してきた。

インクルーシブ公園とは？

誰も排除することなく、すべての人が使える公園。

誰もがのびのびと利用でき、多様性への理解を深め、地域や社会とのつながりを広げていける。

研究の目的

本研究の目的は第一に、愛知県内の9箇所を対象に比較分析を行い、利用者特性ごとに影響を与える公園条件(色彩・素材・動線等)を分析すること。第二にインクルーシブ公園の機能や課題、可能性を抽出し、誰もが使いやすい公園となるための要件を明らかにすることである。

2 研究の位置づけ

既往研究では、公園のユニバーサルデザインや、インクルーシブ遊具のニーズ・導入効果に関する研究はいくつか存在する。しかし、インクルーシブの概念・公園の構成要素を愛知県内の公園において空間的に分析した研究は限定的であり、研究は不足している。

3 研究対象と方法

3-1 調査対象

本研究では愛知県内の9つの施設を対象とした(表1)。選定は第一に、インクルーシブ公園・広場と謳われており遊具が設置されていること。第二に、子どもの人口比率が高い地域(13～17%内)であることとした。

表1 調査対象施設

事例	公園名	所在地	改修年	整備主体	面積
a	細口池公園	名古屋市天白区	2022年4月	名古屋市	約4.3ha
b	油ヶ淵水辺公園(ぶらリン広場)	安城市	2021/12～2023	愛知県	約0.8ha
c	中村公園	名古屋市中村区	2023/4月～	名古屋市	約6.3ha
d	愛・地球博記念公園	長久手市	2024年2月	愛知県	約194.2ha
e	豊川公園「こども広場」	豊川市	2022年3月	豊川市	約11.4ha
f	知立新地ドリームパーク	知立市	2023・2025/2	知立市	約0.15ha
g	池下公園	東海市	2023年4月	東海市	約0.68ha
h	イオンモール豊川 グランドパーク	豊川市	2023年4月	イオンモール株	約12.8ha
i	ばかばかばーく(中京競馬場)	豊明市	2024年11月	名古屋競馬場	約37.6ha

3-2 調査・分析方法

調査は図面収集と現地調査を行った。分析視点は表2に示す。

表2 分析視点

カテゴリ	分析項目	分析視点・具体的な評価内容
空間要素	遊具の有無	・遊具の導入状況・音・感触・視覚など感覚遊びを刺激する要素の有無
	素材・色彩	・地面舗装材の特性・遊具材質車椅子等での移動しやすさ
空間構成	ゾーニング	・動的な遊びと静的な遊びの分離・年齢別・能力別エリア分けと連続性
	動線計画	・遊具までの動線・車椅子同士の通路幅の確保、誘導、見通しの良さ

4 ゾーニングと動線計画について

4-1 ゾーニング

事例aは空間としての使われ方や使用層の違いによってゾーン分けがされている(図3)。また事例bは、活発なエリアと砂遊び等の静かな遊びのエリアを分離するだけでなく、利用者の年齢や身体状況に応じた配慮が見られる(図4)。具体的には、見守りのしやすさを考慮し、乳幼児・幼児用遊具を休憩施設付近に配置すること、幼児用遊具、乳幼児用遊具、児童遊具は利用年齢が異なることから、離隔を設ける・案内図や床面において年齢表記の明白化がされていた(図4.5)。

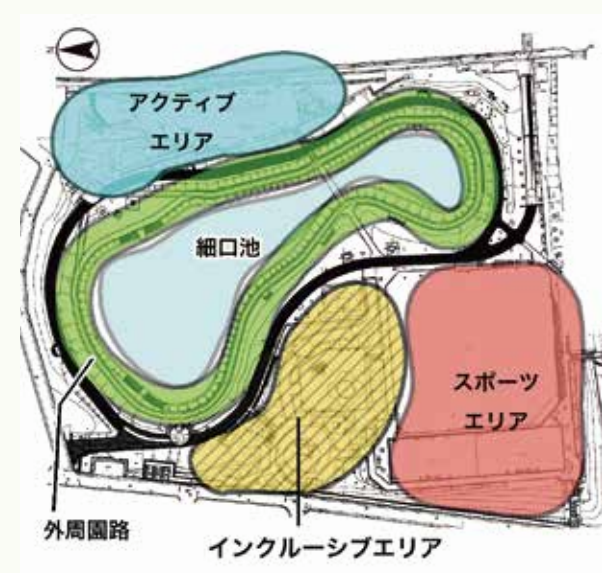


図3 事例a 細口池公園 配置図

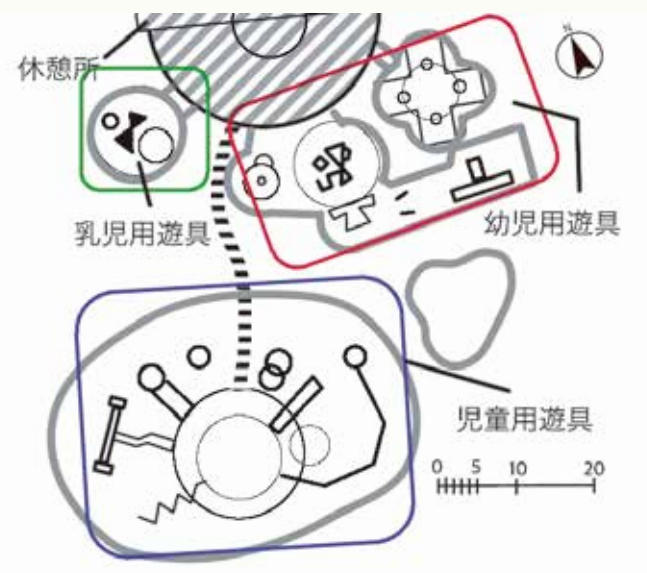


図4 事例b 油ヶ淵水辺公園 配置図

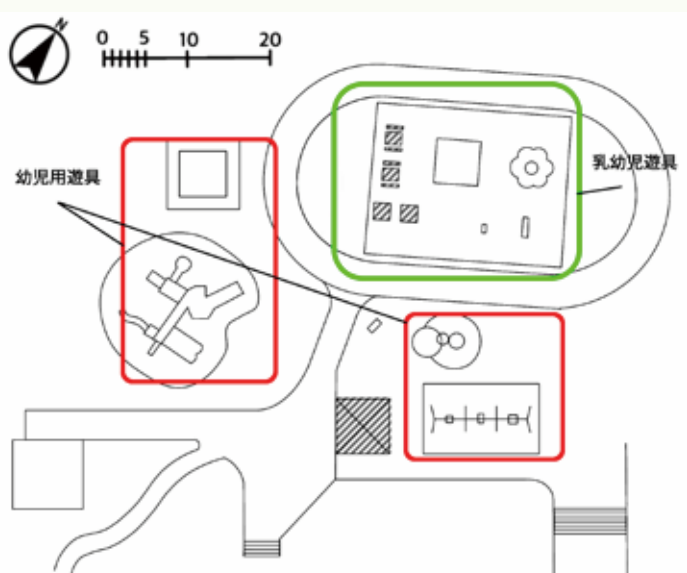


図5 事例j ばかばかばーく 配置図

4-2 動線計画

細口池公園(事例a)では、階段の多い園路構成を見直し、車椅子利用者が園内全体を移動できるようゾーン間をつなぐスロープを設置するなど、回遊性を重視した設計への転換が見られた(図5,8)。

インクルーシブ遊具として、身障者・知的障がい者や小さい子どもも利用する乳児用・幼児用遊具は、休憩所南側のエントランスから直接アクセスできる動線としているなど、主要な入り口から目的の遊具広場まで、直接アクセスできる最短動線の確保などが進んでいる(図6)。また、歩行困難な利用者への配慮として、車いすが利用できる段差のない幅広い動線の確保がされている。

さらに幼児用遊具、乳幼児用遊具、児童遊具は利用年齢が異なることから、利用動線が交錯しないよう、離隔を設けられている。さらに、赤茶色の舗装通路の縁に白いラインを施すことで、空間や動線の境界を明確化していた(図9)。



図5 事例a 細口池公園 平面図

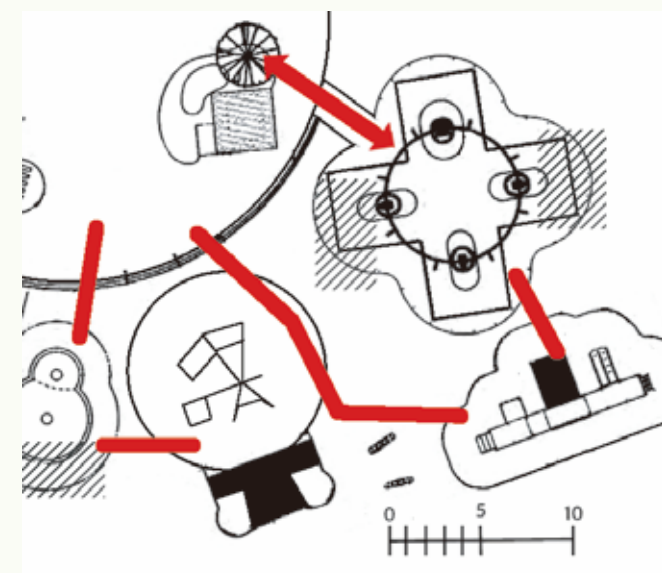


図6 事例b 油ヶ淵水辺公園ぶらリン広場 配置図

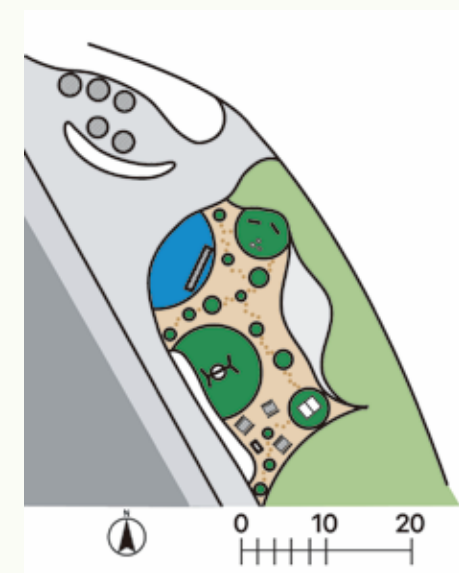


図7 事例h GRAND PARK 配置図



図8 事例a 細口池公園 入口スロープ



図9 事例a 細口池公園 見守りベンチ周辺

5 空間要素について

5-1 遊具の多様性とアクセシビリティ

遊具整備においては、単なる物理的アクセスの確保を超え、多様な遊びの選択肢の提供が重要視されている。調査した9公園すべてにおいて遊びの核となる「複合遊具」が設置されていた。(表16) 特に、体幹の弱い子どもらも利用可能な皿型・バケット型ブランコは7事例採用され、普及が進んでいる(図11)。さらに、従来の「登る・滑る」といった動的な遊びに加え、触覚や音、視覚的刺激を伴う「感覚刺激遊具」を組み込んだ公園が見られ、知的・感覚障害児を含む多様な子どもへの配慮が伺える(図13,14,15)。

また、自閉症スペクトラムの傾向がある子どもや、にぎやかな空間に対して、ストレスを抱える子ども、発達障害や感覚過敏を持つ人が、周囲の刺激から離れて心身を落ち着かせるためのコージードームなどが設置されている(図12)。強い日差しが苦手である視覚過敏や体温調節が苦手である子どものために屋根付きの遊具や、パーゴラが設置されたベンチ、東屋が休憩スペースとして設置されている。



図10 児童用遊具周辺(事例g)



図11 インクルーシブブランコ



図12 コージードーム(事例e)



図13 幼児用遊具周辺(事例b)



図14 感覚刺激遊具(事例d)



図15 感覚刺激遊具(事例d)

表16 設置遊具・設備

事例	複合遊具	遊具駐車場	ブランコ	多目的トイ	感覚刺激	パビリオン	手洗い・水飲み場	すべり台	コージードーム	砂場	スプリング	障害者用	山車遊具	田舎遊具	ハーフドーム型	2つの方向から遊べる遊具	遊具のそばにベンチがある遊具	遊具のそばにトイレがある遊具	東屋	ネット遊具
a	1*	1	1*	1	1	1	1*	1	1	1*	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
b	1*	1	1*	1	1	0	1	1	1	1	1	0	1	0	0	1	1	0	0	0
c	1*	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1	1	0	0	1	0	0	0
d	1*	1	1	1	1	1	0	0	1	0	1	0	1	1	0	1	0	1	0	1
e	1*	1	1*	1	1	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0
f	1*	1	1*	1	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
g	1*	1	0	0	1	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
h	1*	1	1*	1	1	1	1*	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0
i	1*	1	1*	1	0	1	1*	0	0	1*	1	0	1	0	0	1	0	0	1	0

設置済: 1 未設置: 0 インクルーシブ対応: 1*

5-2 舗装素材

調査した9公園のうち、インクルーシブエリアの主要動線にゴムチップ塗装、ウレタン舗装や人工芝を全面的または部分的に採用している公園は7公園であった(a, b, d, e, f, h, i)。これにより、車椅子利用時の移動しやすさと、転倒時の衝撃吸収性が確保されている。



図17 幼児用遊具周辺(事例b)



図18 乳幼児用遊具周辺(事例i)



図19 複合遊具(事例b)

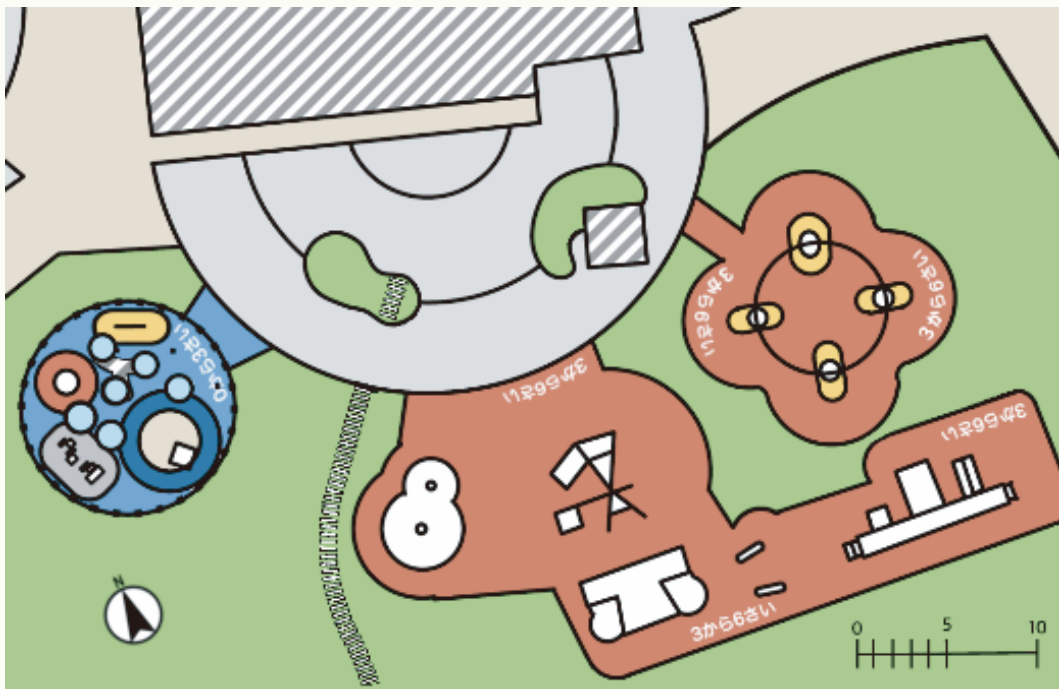


図20 幼児用遊具周辺色彩計画図(事例b)



図21 色彩計画図(事例i)

5-3 色彩

具体的には、弱視者や高齢者が段差や境界を認識しやすいよう、明度差(コントラスト)を活かした配色がなされている。着色が可能なゴムチップ塗装での色彩の傾向としては、ブラウン(赤茶)を基調とし、要所に視認性の高い青や緑を配する事例が最も多く見られたが、視覚過敏の人などにとって、過度な刺激となる色使いを広い面積で多用することは控えられ、赤や黄色などの派手な原色、明度の高い白や輝度の高い色の多用は見られなかった。また、年齢分けを柵のみではなく、エリアの色分けによることで表していた(図17,20)。複合遊具では、青をベースカラーとし、手すりや段差など注意が必要となる部分には黄色が使用され、その他の部分には景観になじむようなアースカラーの採用がされていた。

6 公園の改修年度による整備の特徴

愛知県内のインクルーシブ公園整備は、2022年3月に開設された事例eが県内初となっており、翌4月の名古屋市内初事例である事例aが続いていることから2020年前後から整備が始まった県外の先行事例と比べると近年になって本格化している(表1)。また、当初は法改正や住民要請を背景とした行政主導のモデルケースであったが、2023年以降の公園では、バリアフリーに加えてアクセシビリティと遊びの多様性の両立が重視され、商業施設との一体整備や特殊法人による整備など、主体や形態の多様化が進んでいる。



7 まとめ

空間構成において、動的・静的活動の分離や休憩所・見守りベンチを含めたゾーニング、利用層や年齢層を意識したエリア分けを踏まえた動線計画が重視され、空間全体の機能性向上に寄与していた。また、空間要素では複合遊具や弾性舗装など、知的・身体的障がい者への対応や安全性に加え、近年は視覚・聴覚への刺激や色彩構成など、多様な障害特性に配慮した要素の充実が進んでいることが明らかとなった。さらに整備主体は、行政主導の都市公園から民間企業による商業施設一体型へと多様化しており、インクルーシブ公園が福祉にとどまらず地域や施設の価値を高める存在として認識され始めている。



参考文献

- 1) 赤松瑞枝. インクルーシブ公園整備の留意点: 埼玉県三郷市「なかよしひろば」の事例分析から. 公園緑地. 2024, 85(2), 22-25.
- 2) 上田博之. インクルーシブ遊具の体験会による利用者ニーズの把握. 公園緑地. 2024, 85(2), 35-36.
- 3) 養茂壽太郎. 公園の進化とユニバーサルデザイン～始動期のバリアフリーからインクルーシブデザインの未来へ～. 都市緑化技術. 2015, 98, 2-5. 寺田
- 4) みーんなの公園プロジェクト(編). すべての子どもに遊びを: ユニバーサルデザインによる公園の遊び場づくりガイド. 萌文社, 2017